

第6期事業報告書

平成16年1月1日 ▶ 平成16年12月31日



アンジェス MG株式会社

証券コード4563

Top Interview

トップインタビュー

日米両国でHGF遺伝子治療薬の臨床試験が進展



代表取締役社長 山田 英

Q

2004年度を振り返って、株主の皆様への報告をお願いします。

A

昨年は、日本経済が回復の兆しを見せ、一時期20兆円近くまで低下していた全産業の経常利益は確実に増加の傾向を示し、史上最高益を更新する企業が多く見られました。しかしながら、10年以上に亘り低迷してきた日本経済の実態を経験してきた我々にとっては、日本企業が持続的な競争力の基盤を確立して初めてその回復を容認できるものと思われれます。さらに、改めて認識すべきことは、市場の競争によるスクリーニング、所謂「勝ち組」と「負け組」の差がより鮮明になってきていることです。日本経済の復活には、技術集約的な先端領域での企業

の国際的な競争力の維持・開発が不可欠ですが、我々アンジェスはバイオ領域の中でまさにその一端を担っており、この「勝ち組」の中の代表的な存在を目指しています。

翻って昨年の国内株式市場を見ると、株式を新規公開した企業数が175社（前年比45%増）と4年ぶりに前年実績を上回り、過去3番目の高水準に達しました。好調な企業業績に加え、株価が堅調に推移したため、株式公開を見合わせてきた企業が上場に踏み切る例が増えてきたと言えます。その中でも、バイオ領域では5社が上場を果たし、昨年末の時点で株式時価総額は3,000億円強となりました。この傾向をさらに拡大させるのは、我々バイオ企業の役割であり、アンジェスは、取りも直さずリーディングカンパニーとしての重責を果たさなければなりません。

昨年の業績を振り返りますと、HGF遺伝子治療薬に関しては、日本で3月にPAD（末梢性血管疾患）の多施設二重盲

検試験を第Ⅲ相臨床試験として開始、米国でも、11月にIHD（虚血性心疾患）の第Ⅰ相臨床試験を開始しました。ともに遺伝子治療薬という新薬開発分野における画期的な進展と言えます。NF κ Bデコイオリゴに関しては、薬効の検討を精力的に行い、アトピー性皮膚炎などの対象疾患の重点化を進めてきました。HVJ-E非ウイルス性ベクターに関しては、一昨年の子会社ジェノメディア株式会社の統合のもと、遺伝子機能解析の高速化システムの完成、診断薬シーズの探索、また、臨床応用への適用という観点から、本格的な事業展開を目指し環境を整え始動しました。その他、4月にはバイオベンチャーの集積地である米国西海岸でライセンス活動を本格化するために米国拠点を拡充し、6月には虚血性疾患領域強化のためネオケミア株式会社と炭酸ガス発生型創傷被覆材の開発について提携を行いました。また、東京大学の22世紀医療センタープロジェクトに参画して寄附講座を設け、遺伝子治療薬と細胞治療薬など先端臨床医学の共同研究という新しい基盤を整えました。さらに、8月には彩都（茨木市）に設立された彩都バイオインキュベータに研究開発の拠点を移転しました。



Q

2005年度の抱負をお聞かせ下さい。

A

2005年度の最重要目標はHGF遺伝子治療薬開発プロジェクトのさらなる推進です。特に日本におけるPADの第Ⅲ相臨床試験、米国におけるPADの第Ⅱ相臨床試験、米国におけるIHDの第Ⅰ相臨床試験の成就是重要課題で、同時開発を目指す日米の協力関係のさらなる構築と厳しいプロジェクト管理がより強く要求されます。これらは全ての課題に優先します。また、新しい脳領域への挑戦としてパーキンソン病などの疾患についても、臨床開発への移行を前提に新しい展開を目指します。

NF κ Bデコイオリゴについては、アトピー性皮膚炎を筆頭に臨床開発を開始します。各疾患の優先順位についてはさらに検討が必要ですが、アトピー性皮膚炎は前臨床データが整い、独立行政法人医薬品医療機器総合機構からの資金的支援も確定し、臨床試験を実施できる環境が整備されました。また、IBD（炎症性腸疾患）については、NEDO（独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構）から

の資金援助が決まり、ジェノメディア株式会社とともに新規アプローチを開始します。その他、関節リウマチ、変形性関節症、乾癬、血管再狭窄予防についても、試験データを見ながら優先順位化を進めます。

HVJ-E非ウイルス性ベクターについては、遺伝子機能解析の高速化・高度化により有用な機能を持った遺伝子が見出されつつあります。遺伝子機能解析を活用して治療薬あるいは診断・検査薬のシーズ探索を効率よく進めるビジネスモデルの事業化が肝心です。これからの診断薬開発は治療薬開発を念頭に進める必要があります。また、HVJ-E非ウイルス性ベクターの臨床応用における効用が薬効試験から示唆されるに至り、その可能性を具現化してまいります。

従来通り、アンジェスは、上市に至るまでの一定の期間は赤字を覚悟し研究開発に資源を傾注していく基本方針に変わりはありません。また、自社開発プロジェクトだけではなく、第4の柱となる製品・事業分野の確立、海外を含め

他社製品の導入、他社との連携なども積極的に進めていきます。他方、事業の集中と選択、業務の見直しと効率運営の具体化、コスト削減は、全社的に推し進めていく必要があり、提携先発掘による収益確保も課題です。

アンジェスは2002年には株式公開を果たし、昨年12月17日には創業5年を迎えることができました。これからの5年は、今までの単なる延長ではなく、アンジェスを次のステップに引き上げる重要な5年です。2005年は、文字通り第二の創業の始まりです。その意味でも、今年は、アンジェス創業の原点に立ち返り、形振り構わず道を進む年にしてまいります。



「彩都研究所が入居した彩都バイオインキュベータ」

医薬品開発の状況

プロジェクト	対象領域	地域	開発段階	提携等
HGF遺伝子治療薬	末梢性血管疾患	日本	第Ⅲ相	第一製薬株式会社
		米国	第Ⅱ相	
	虚血性心疾患	米国	第Ⅰ相	
	パーキンソン		前臨床	未定
NF κ Bデコイオリゴ	アトピー性皮膚炎		臨床準備中	未定
	乾癬		前臨床	未定
	関節リウマチ		臨床準備中	生化学工業株式会社
	変形性関節症		前臨床	
	血管再狭窄予防		臨床準備中	株式会社グッドマン

一般的な新薬開発のプロセスと期間

一般的に医薬品の開発は、新薬候補物質が決まるとまず動物試験など前臨床試験が実施され、有効性及び安全性などが確認されます。この前臨床試験を経て、実際にヒトに投与する臨床試験（治験）に入ります。

臨床試験は、通常、下記の通り第Ⅰ相、第Ⅱ相、第Ⅲ相に分かれて実施されます。医薬品を開発する製薬会社は、これら試験における新薬候補物質の有効性及び安全性の成績をもって、行政当局に新薬承認申請し、承認が得られた後に発売可能になります。

ただし、癌など重篤な疾患を対象とする場合には、必ずしも臨床試験の構成が下記の通りになる訳ではなく、より効率的な試験の構成が可能になる場合もあります。

プロセス	期間	内容
基礎研究	2～3年	新規物質の創製及び候補物質の絞り込み
前臨床試験	3～5年	実験動物を用いて、有効性及び安全性を確認する試験
臨床試験	3～7年	第Ⅰ相：少数健康人を対象にして、安全性及び薬物動態を確認する試験
		第Ⅱ相：少数患者を対象にして、有効性及び安全性を確認する試験
		第Ⅲ相：多数患者を対象にして、既存薬との比較により有効性及び安全性を確認する試験
申請・承認	1～2年	国（厚生労働省）による審査

Main Project

主要プロジェクト

1

HGF遺伝子治療薬

HGF（Hepatocyte Growth Factor、肝細胞増殖因子※1）は、肝臓の細胞を増やす因子として1984年に大阪大学の中村敏一教授により発見されました。最初は、肝臓の病気の治療薬として研究されていましたが、HGFの遺伝子を投与することで血管を新しく増やす治療法が1995年に大阪大学大学院の森下竜一寄附講座教授により発明されました。HGF遺伝子治療薬は、血管が詰まり血流が悪くなっている虚血性疾患に対して、血管を新生するというこれまでにない治療薬になる可能性があります。

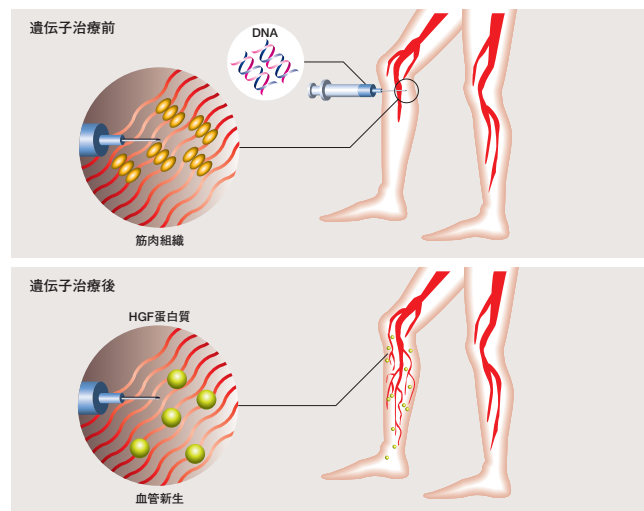
血管が詰まることにより生じる病気には、例えば、①糖尿病などにより足の血管が閉塞し、血液がうまく届かず壊死して最終的には足を切断しなければならなくなる末梢性血管疾患※2（閉塞性動脈硬化症やバージャー病）や、②心臓の冠動脈の血流が悪くなって起こる虚血性心疾患※3（狭心症や心筋梗塞）があります。これらの病気に対しては、重症になると、薬物療法のほか、バルーンカテーテル（カテーテルにより血管を通して動脈の形成を行う治療）やバイパス手術を施しますが、それでも十分に回復しない場合があります。HGF遺伝子治療薬は、こうした他に治療法がなく、足を切断せざるを得ない症例に対しても効果が期待され、注射という簡便な方法で血管を新生させ治療することを目指しております。当社グループでは、まず、従来の治療法では十分に回復しない症例を対象に開発を進める方針です。

このような血管新生療法は、米国では、VEGF（Vascular Endothelial Growth Factor、血管内皮細胞増殖因子）やFGF（Fibroblast Growth Factor、線維芽細胞増殖因子）等を用いた遺伝子治療の臨床試験が行われ、血流が回復して足の切断を免れた症例も報告されております。HGFは、これら競合の遺伝子治療薬より血管新生作用が強いことが動物実験で示されており、しかもVEGFでみられる浮腫の副作用が見られていないことから、有効性と安全性の両面で競合品と差別化できると考えております。

末梢性血管疾患領域については、米国で第Ⅱ相臨床試験、日本で多施設二重盲検試験を第Ⅲ相臨床試験として実施しております。虚血性心疾患領域についても、米国で第Ⅰ相臨床試験を進めております。

なお、HGF遺伝子治療薬の末梢性血管疾患及び虚血性心疾患領域については、第一製薬株式会社と販売提携しております。

注射によるHGF遺伝子治療（末梢性血管疾患）



用語解説

※1 肝細胞増殖因子（Hepatocyte Growth Factor: HGF）肝細胞から発見された増殖因子で、血管新生作用を有するほか、発生過程における器官形成や傷害に伴う組織・器官の再生において重要な役割を担います。

※2 末梢性血管疾患（peripheral arterial disease）四肢の末梢血管が閉塞することにより、筋肉や皮膚組織が虚血状態に陥り、しびれ、冷感、間歇性跛行、安静時疼痛、下肢潰瘍などの症状を示します。閉塞性動脈硬化症やバージャー病があります。

※3 虚血性心疾患（ischemic heart disease）心臓を養う動脈（冠動脈）がある程度狭窄すると、労作時に十分な血液が流れず、胸苦しさや胸痛などの症状を示す狭心症や、冠動脈が完全閉塞し、心筋組織が虚血状態になる心筋梗塞があります。

2

NF κ Bデコイオリゴ

遺伝子医薬には大きく分けると二つの方法があります。一つは、HGF遺伝子治療薬のように遺伝子そのものを利用するもの、もう一つは核酸合成機で作成される人工遺伝子を利用するものです。後者は、遺伝子そのものではなく、遺伝子の構成成分の一部のみを使うため人工遺伝子と呼ばれたり、核酸からできているので核酸医薬と呼ばれたりしております。

デコイは、この核酸医薬の一種です。遺伝子は、転写因子がゲノムに着地してスイッチが入りますが、デコイは、そのゲノム上の転写因子結合部分と同じ配列を含む短い核酸(DNA)を人工的に合成したもので、体内に投与すると転写因子がゲノムに着地することを阻害して遺伝子の働きを抑えます。

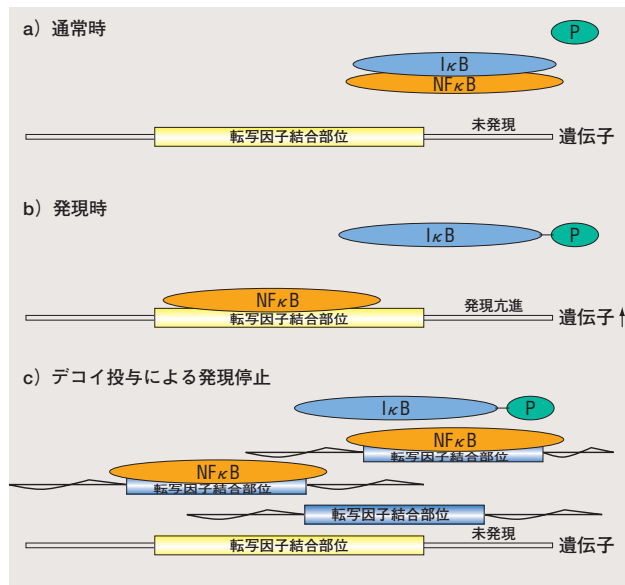
NF κ Bは、免疫反応を強める遺伝子のスイッチである転写因子で、このNF κ Bに対するデコイを作成することでアトピー性皮膚炎や関節リウマチなど過剰な免疫反応を原因とする病気の治療を目指しております。この治療法は、1995年に大阪大学大学院の森下竜一寄附講座教授により発明されました。現在、当社では、NF κ Bデコイオリゴの有効性や安全性などを動物実験等で確認する前臨床試験を実施しております。

なお、NF κ Bデコイオリゴについては、関節リウマチ及び変形性関節症領域において生化学工業株式会社と共同研究契約を締結しているほか、血管再狭窄予防^{※4}領域において株式会社グッドマンと業務提携をしております。

用語解説

※4 血管再狭窄予防
(血管の)狭窄とは、血管が詰まり狭くなってしまうことです。動脈硬化により生じる冠状動脈などの狭窄は、主にバルーンカテーテルを用いた血管拡張術(いわゆる風船療法)により狭窄部位を広げる治療法が用いられています。しかしながら、この手法は、30~40%の症例において、(再度血管の詰まる)再狭窄が生じるという欠点があり、血管拡張術後の再狭窄を予防できる製品の開発が期待されています。

NF κ Bデコイオリゴの作用原理



3

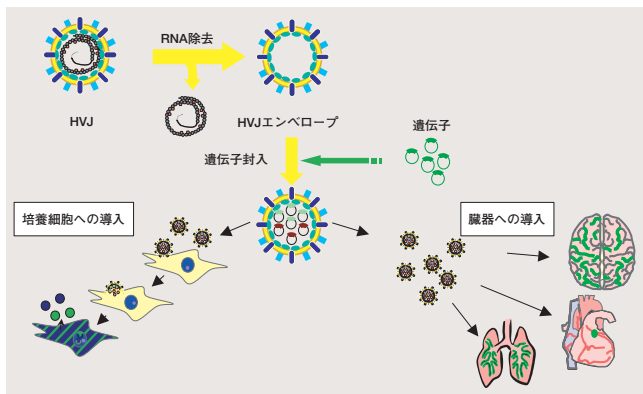
HVJエンベロップベクター

遺伝子が体内でうまく働くためには、細胞の中に入らなければなりません。遺伝子は、そのまま細胞に近づくことはできても、細胞の中に入っていくことはできません。遺伝子治療薬には、細胞の膜を突破し、細胞の中に遺伝子を運ぶ役目をする優れたベクター（運び屋）が必要になります。

HVJ（Hemagglutinating Virus of Japan、別名センダイウイルス）は、1950年代に日本で発見されたウイルスです。このHVJの中のゲノムを全て除去し、膜のみを用いるベクターがHVJエンベロップベクター（以下、HVJ-E非ウイルス性ベクター）です。このベクターの製造方法が、2000年に大阪大学大学院の金田安史教授により発明されました。

HVJ-E非ウイルス性ベクターは、膜に細胞を融合（細胞融合）する作用があることから、遺伝子を細胞に導入する効率が高く、しかもウイルスゲノムが全て除去されているため、ヒトに対する安全性も高いベクターです。遺伝子治療に用いるベクターは、主にウイルス性ベクターと非ウイルス性ベクターに分けられます。

HVJ-E非ウイルス性ベクターによる遺伝子導入システム



す。ウイルスの感染能力を利用するウイルス性ベクターは、導入効率は高いが安全性の面に問題があり、脂質材料などによる非ウイルス性ベクターは、安全性は高いものの導入効率の面に問題がありました。HVJ-E非ウイルス性ベクターは既存ベクターの持つこれらの問題点が解決されているため、汎用性が高く、世界をリードするベクターになる可能性があります。

HVJ-E非ウイルス性ベクターは、遺伝子治療薬への応用のほか、核酸医薬や蛋白医薬、さらに低分子化合物など従来からある医薬品の薬剤吸収を向上するDDS（ドラッグデリバリーシステム）として有効である可能性があります。

また、HVJ-E非ウイルス性ベクターは、膜に細胞融合作用があることから、高い効率で、しかも迅速に遺伝子を運び込むことができ、ウイルスのゲノムが全て除去されていることから、ヒトに対する安全性も高く、一度に大量の遺伝子を封入することもできます。このため、HVJ-E非ウイルス性ベクターは、遺伝子機能解析のツールとしても有力な手段です。ベクターにより調べたい遺伝子を細胞や臓器に導入し、実際にどのような影響が出るかを観察することで新規有用遺伝子を見つけることができます。

以上、HVJ-E非ウイルス性ベクターは、遺伝子治療やDDSとして医薬品分野に応用する研究開発を進めていますが、その一環として池田ラボにおいて、GMP（Good Manufacturing Practice、医薬品の製造管理及び品質管理に関する基準）に準拠した製造用パイロットプラントを用いて、マスターセルバンク及びマスターウイルスバンクを作製しました。

また、大阪大学大学院医学系研究科金田安史教授、産業技術総合研究所関西センターと共同で開発しておりました高速遺伝子機能解析デバイスが完成し、同デバイスを用いた新規遺伝子の探索研究などにより新規有用遺伝子を同定しました。さらに、これら新規遺伝子のSNPsを用いた診断法の開発にも着手しています。

Consolidated Financial Statements

連結財務諸表

●連結貸借対照表

科目	当期	前期
	(平成16年12月31日現在)	(平成15年12月31日現在)
資産の部		
流動資産	9,488,373	10,596,116
現金及び預金	7,003,451	6,072,021
売掛金	82,122	84,765
有価証券	499,100	2,298,748
たな卸資産	544,684	530,167
前渡金	656,659	935,523
前払費用	71,190	76,183
立替金	127,116	96,840
信託受益権	500,000	500,000
その他	4,047	1,982
貸倒引当金	—	△116
固定資産	520,991	378,007
有形固定資産	219,492	198,059
建物	60,172	106,194
機械装置	10,262	18,417
工具器具備品	149,056	73,447
無形固定資産	248,713	126,455
連結調整勘定	12,773	20,361
特許権	173,141	98,645
その他	62,799	7,448
投資その他の資産	52,786	53,492
投資有価証券	1,000	1,000
敷金保証金	36,997	41,898
その他	14,788	10,594
資産合計	10,009,364	10,974,124

(単位：千円)

科目	当期	前期
	(平成16年12月31日現在)	(平成15年12月31日現在)
負債の部		
流動負債	1,240,312	1,493,753
買掛金	117,289	107,939
未払金	122,273	60,354
未払費用	4,427	5,413
未払法人税等	10,960	5,458
未払消費税等	—	34,920
前受金	978,379	1,272,617
預り金	6,982	7,049
負債合計	1,240,312	1,493,753
少数株主持分		
少数株主持分	112,526	26,037
資本の部		
資本金	5,156,314	4,784,341
資本剰余金	6,453,707	6,081,734
利益剰余金	△2,940,607	△1,399,134
その他有価証券評価差額金	△900	△1,957
為替換算調整勘定	△11,989	△10,651
資本合計	8,656,525	9,454,332
負債、少数株主持分及び資本合計	10,009,364	10,974,124

●連結損益計算書

(単位：千円)

科目	当期	前期
	(自 平成16年1月1日 至 平成16年12月31日)	(自 平成15年1月1日 至 平成15年12月31日)
事業収益	2,696,299	2,453,440
事業費用	4,257,342	3,401,719
研究開発費	3,679,079	2,807,757
販売費及び一般管理費	578,263	593,962
営業損失	1,561,043	948,278
営業外収益	13,755	31,965
受取利息	5,670	605
為替差益	—	9,502
補助金収入	2,030	19,929
還付消費税等	3,475	—
賃貸収入	1,692	—
雑収入	885	1,928
営業外費用	11,701	37,634
新株発行費償却	6,741	35,925
為替差損	4,827	—
雑損失	133	1,709
経常損失	1,558,989	953,947
特別利益	62,967	224
貸倒引当金戻入益	116	224
持分変動利益	62,850	—
特別損失	44,844	24,730
固定資産除却損	44,844	188
前渡金処理損失	—	24,541
税金等調整前当期純損失	1,540,866	978,452
法人税・住民税及び事業税	10,228	4,571
法人税等調整額	—	△482
少数株主損失	9,623	4,100
当期純損失	1,541,472	978,440

●連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：千円)

科目	当期	前期
	(自 平成16年1月1日 至 平成16年12月31日)	(自 平成15年1月1日 至 平成15年12月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー	△1,433,547	△689,062
投資活動によるキャッシュ・フロー	2,962,171	△4,484,790
財務活動によるキャッシュ・フロー	899,705	5,927,663
現金及び現金同等物に係る換算差額	3,101	△11,296
現金及び現金同等物の増加額	2,431,430	742,513
現金及び現金同等物の期首残高	4,572,021	3,829,508
現金及び現金同等物の期末残高	7,003,451	4,572,021

●連結剰余金計算書

(単位：千円)

科目	当期	前期
	(自 平成16年1月1日 至 平成16年12月31日)	(自 平成15年1月1日 至 平成15年12月31日)
(資本剰余金の部)		
資本剰余金期首残高	6,081,734	3,099,940
資本剰余金増加高	371,973	2,981,794
増資による新株式の発行	—	2,930,147
ストックオプション行使による新株式の発行	371,973	51,647
資本剰余金期末残高	6,453,707	6,081,734
(利益剰余金の部)		
利益剰余金期首残高	△1,399,134	△420,693
利益剰余金減少高	1,541,472	978,440
当期純損失	1,541,472	978,440
利益剰余金期末残高	△2,940,607	△1,399,134

単体決算の概要

●要約貸借対照表

(単位：千円)

科目	当期	前期
	(平成16年12月31日現在)	(平成15年12月31日現在)
資産の部		
流動資産	9,012,489	10,387,059
固定資産	660,104	442,722
資産合計	9,672,593	10,829,781
負債の部		
流動負債	1,050,122	1,368,157
負債合計	1,050,122	1,368,157
資本の部		
資本金	5,156,314	4,784,341
資本剰余金	6,453,707	6,081,734
利益剰余金	△2,986,650	△1,402,493
その他有価証券評価差額金	△900	△1,957
資本合計	8,622,471	9,461,624
負債資本合計	9,672,593	10,829,781

●要約損益計算書

(単位：千円)

科目	当期	前期
	(自 平成16年1月1日 至 平成16年12月31日)	(自 平成15年1月1日 至 平成15年12月31日)
事業収益	2,669,149	2,452,246
事業費用	4,212,402	3,408,020
営業損失	1,543,253	955,774
営業外収益	18,452	34,586
営業外費用	11,337	37,634
経常損失	1,536,139	958,821
特別利益	118	226
特別損失	44,533	24,541
税引前当期純損失	1,580,553	983,136
法人税、住民税及び事業税	3,602	3,794
当期純損失	1,584,156	986,930
前期繰越損失	1,402,493	415,563
当期末処理損失	2,986,650	1,402,493

●損失処理計算書

(単位：千円)

科目	当期	前期
	(平成17年3月30日承認)	(平成16年3月30日承認)
当期末処理損失	2,986,650	1,402,493
損失処理額		
資本準備金取崩額	2,986,650	—
次期繰越損失	—	1,402,493

Corporate Data

会社概要 (平成16年12月31日現在)

会社名：アンジェス MG株式会社
(英文名：AnGes MG, Inc.)

会社設立：平成11年12月17日

決算期：12月31日

資本金：5,156百万円

従業員数：52名

●事業所

本社

〒567-0085 大阪府茨木市彩都あさぎ七丁目7番15号
彩都バイオインキュベータ4階

彩都研究所

〒567-0085 大阪府茨木市彩都あさぎ七丁目7番15号
彩都バイオインキュベータ4階

東京支社

〒108-0014 東京都港区芝五丁目20番14号 三田鈴木ビル5階



Stock Information

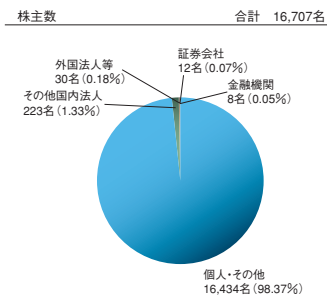
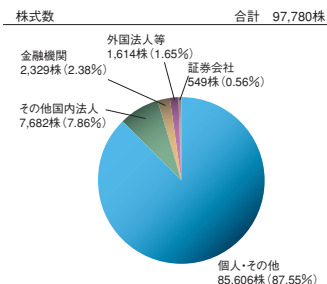
株式の状況 (平成16年12月31日現在)

会社が発行する株式の総数	246,976株
発行済株式の総数	97,780株
株主数	16,707名

●大株主の状況

株主名	持株数	議決権比率
森下 竜一	12,570株	12.86%
中村 敏一	7,000株	7.16%
有限会社イー・シー・エス	5,113株	5.23%
バイオフィロンティア・グローバル投資事業組合 業務執行組合員 株式会社バイオフィロンティアパートナーズ	3,305株	3.38%
森下 翔太	2,400株	2.45%
森下 真弓	2,400株	2.45%
富田 憲介	2,065株	2.11%
小谷 均	1,985株	2.03%
日本トラスティサービス信託銀行株式会社	1,697株	1.73%
小谷 希美子	1,600株	1.63%

●所有区分別 株式分布状況

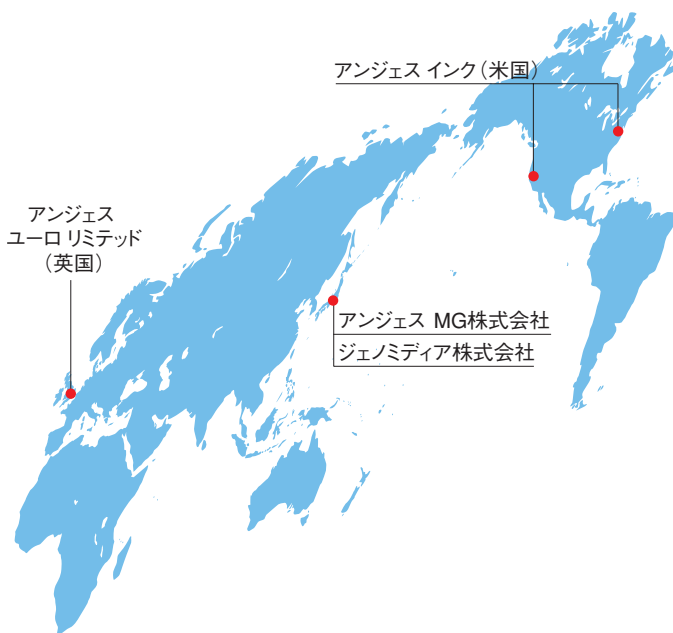


●役員

代表取締役社長	山田 英
取締役副社長	小谷 均
取締役	中塚 琢磨
取締役	森下 竜一
取締役	榎 史朗
常勤監査役	池田 勉
監査役	遠山 伸次
監査役	菱田 忠士

●アンジェス MGグループ

会社名	資本金 主要な事業内容	当社議決権比率
アンジェス インク	100千米ドル 米国での遺伝子医薬品の臨床開発	100.0%
アンジェス ユーロ リミテッド	50千英ポンド 欧州での遺伝子医薬品の臨床開発	100.0%
ジェノメディア株式会社	196,250千円 遺伝子治療用ベクター及びドラッグデリバリーシステムの研究開発、新規有用遺伝子及び分子の探索、遺伝子機能解析	61.6%



●株主メモ

決 算 期 12月31日
定時株主総会 3月中
基 準 日 12月31日(利益配当金) 6月30日(中間配当金)
名義書換代理人 東京都千代田区丸の内一丁目4番3号
UFJ信託銀行株式会社
同事務取扱場所 〒137-8081 東京都江東区東砂七丁目10番11号
UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
電話03-5683-5111 (代表)
同 取 次 所 UFJ信託銀行株式会社 全国各支店
野村證券株式会社 本店及び全国各支店
公 告 掲 載 新 聞 日本経済新聞
貸借対照表及び損益計算書掲載のホームページアドレス
http://www.anges-mg.com/ir_financial.htm

ホームページを
ご覧ください。

最新のニュースリリースやIR資料
などを掲載しております。
ぜひご覧ください。

ホームページアドレス
<http://www.anges-mg.com>



この事業報告書に関するお問い合わせ先
東京支社 03-5730-2753